

# 基本的な生活習慣における「あいさつ」についての考察

— 道徳性の育成の視点として —

*A Consideration of "Greeting" in Fundamental Habit*

— A Point of View of the Moral Education —

安部 孝 ABE Takashi

(人間発達学部)

## 1 はじめに——課題意識

あいさつは、「相手に敬意・親愛の意を示す行為で、対人関係を円満」にし、社会生活を円滑に営むうえで大切な基本的な生活習慣（以下、生活習慣）の一つである。あいさつは、幼稚園教育では「親しみをもって日常の挨拶をする」よう指導され<sup>1)</sup>、小学校教育では、道徳科（「特別の教科 道徳」）の「内容項目の指導の観点」「B 主として人との関わりに関すること 礼儀」に「気持ちのよい挨拶、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接すること」と示され<sup>2)</sup>、指導の重点事項などに取り上げている学校もある<sup>3)</sup>。また、あいさつは、礼儀として家庭や地域社会での生活でも日常的に指導され身に付いていくが、それは先述のとおり、あいさつが「親しみ」「気持ちのよさ」<sup>4)</sup>を求め、誘うものであり、望ましいがゆえに必要であり、有効と認識されているからと考えられる<sup>5)</sup>。そこで、あいさつが身に付く背景や理由に着目し、道徳教育のあり方を検討したいと考える<sup>6)</sup>。

## 2 目的と方法

本研究では、「あいさつ」の感謝としての意味を、学校や地域社会における生活習慣の育成と、幼児の保護者の生活習慣についての意識を視点に検討する。そして、あいさつが行われ、それが価値として定着するために必要な要素について検討する。(図1参照)

展開としては、まず、中川小の「あいさつ」の意味を、実践と取材の内容をもとに整理し、生活習慣の獲得に必要な要因を検討する。中川小における「あいさつ」は「感謝」の意であるが、感謝が生じ、あいさつがなされることを道徳的心情の問題から考察する。

次に、生活習慣について幼稚園の保護者を対象とした意識調査を行い、特に、「『基本的な生活習慣』のイメージ」「身に付けさせたい『基本的な生活習慣』」「『基本的な生活習慣』を身に付けさせるために大切なこと」と、「あいさつ」に対する意識をもとに検討する。

そして、「あいさつ」を、あいさつをする・される双方の側の問題ととらえたときに、なぜそこに「あいさつ」が生じ、またよさや価値を見出し得るのかについて、幼児教育者である倉橋惣三（1882-1955）の道徳論を援用し、検討していく。倉橋の知見は、生活習

慣を道徳性の基礎と位置付け、家庭や地域における教育を第一義とする幼児期や、それを基盤とする学校教育における道徳教育の在り方を検討するには有効な手掛かりと考える。

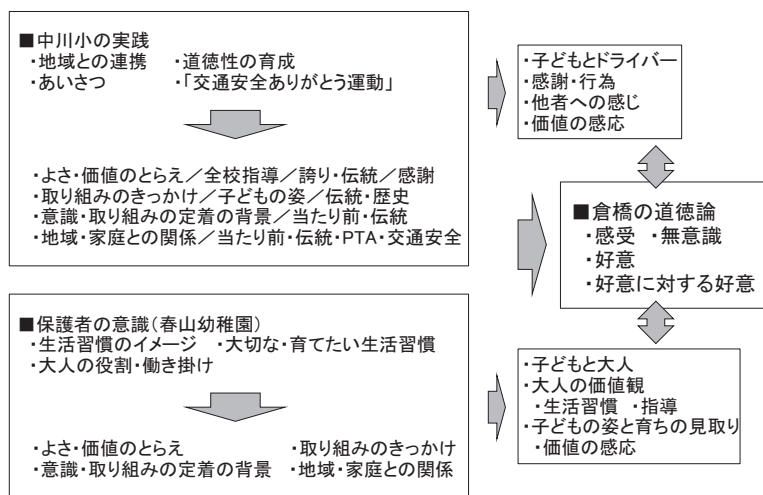


図1 研究のイメージ

本来、生活習慣の育成は自立を目指すものであり、それが子ども一人一人において自律的に為されることが望ましい。それは、よい生活や生き方を自ら求め実践することでもある。

あいさつや感謝の意味や望ましさを学習し、理解することは可能である。しかし、学習以前に、ふとそのように行動する理由を、倉橋の思想に抛って検討する。

これまでの考察では、人は感じたように思い・考え、そのように行動するということを基底に置いており、それゆえ行為は目的々である。だが、中川小の子どものあいさつが、ふとした行為だとしたら、心情の発露としての生活習慣の行為の根拠を、これまでとは異なる視点で検討する必要があると考える。

### 3 内容

#### 3-1 南陽市立中川小学校（以下、中川小）における「あいさつ」

中川小の実践<sup>7)</sup>における「あいさつ」を概観する。中川小ではあいさつを、30年ほど前の児童らの行為が発祥のきっかけとなった「交通安全ありがとう運動」との一体的理解のもとに、継続的に指導している。著者は、この実践を手掛かりとした検討に取り組み、その一部を、令和元年度日本道徳教育学会第94回大会にて発表している（「道徳性の育成と基本的生活習慣について—あいさつを視点に—」<sup>8)</sup>）。そのときの考察は、次のとおりである（「発表補助資料 ppt.『4 考察』」より抜粋、及び一部改変。下線は安部による）。

あいさつは、儀礼や日常的行為でもあり、型をもつ。それは動作や言葉であったりする。だが、現実には相互にあいさつが交わされることを重視し必要としていられる。つまり、そこで理由や目的（本研究では中川小の感謝や太田の承認・融合、親密儀礼等）を理解し、ふさわしいと判断できればよいこととなる。ただしそれ

ぞれ、また相互において理解していること、理解し解釈し得ることも必要になる。

あいさつはそれを行うことでしか実践（為）されず、したがって他者への心情や自律性、善悪の判断などは都度、試されることになり、基本的生活習慣において道徳性は培われ、鍛えられると考えられる。その意味で、学校における道徳教育は、地域や家庭、地域の習慣とつながりながら、この機会、場としての役割の一つを担うことができるのだと考える（中川小のような確認も有効である）。

だが、付加する条件や価値の要求に応え、賞賛や承認を得ることを親しみや気持ちのよさ（これは太田の親密とどのように関係するか）と間違えて認識するとき、道徳性は育まれず、生活習慣は形骸化した行為となる。これは、当たり前と思う根拠にもなり得（本来の目的が隠れてしまう可能性）、留意する必要がある。

中川小のあいさつ（感謝）は、他者の親切や思いやりを誘引した。これは、あいさつの動作、行為に対する理解（察し）があったからに他ならず、安全・安心がもたらされたことで、（本来感謝であった）あいさつ自体が新たな意味（交通安全）をもつようになった。つまり、以降、習慣化された場面において、安全への配慮に対する感謝を認識（自覚）することも、またそれを自ら行うこともあり得ると言える。付される価値に関わって考えるなら、「感謝してあいさつする」ことと、「あいさつして感謝の意を表す」こととが考えられ、いずれも必要となる。

### 3-1-1 学校全体としての取組み（中川小『平成30年度学校経営概要』から）

中川小では赤湯中学校区（以下、赤中校区）で展開する「幼保小中一貫教育」をもとに、独自の「かがやきプラン」を実践、展開している。赤中校区における「4つの重点」の一つには、「小中共同、連動して『あいさつ運動』を行い、元気にあいさつできる子どもを育てます」と示され、中川小では「見小連携<sup>9)</sup>で「育てていく力」に「元気なあいさつ」を掲げている。さらに「いのちの教育推進構想」においては、「心からのあいさつ運動」を掲げ、「中川小で大切にしたい」子ども像へのアプローチを図っている。また、「地域・家庭・児童館・中学校との連携」のPTAの項目に「交通安全ありがとう運動・あいさつ運動」が示されている<sup>10)</sup>。中川小においては、学校、家庭、地域においてこれらの運動や取り組みを通して子どもの意識（道徳性）の向上（育成）を図ることに努めている。

### 3-1-2 あいさつと「交通安全ありがとう運動」<sup>11)</sup>

「全校道徳—『あいさつ』—(指導講話)」（「かがやきタイム」：平成30年1月10日）

あいさつをする側とされる側に分かれてロールプレイング（通学途上の場面）を行った。それは、現在子どもたちが日常的に経験し、イメージし得ることはあるが、学習のねらいとしては「交通安全ありがとう運動」の由来としての場面（図2）を再現し、当

事者としての心情や行動を考えさせるものであった。ロールプレイングでは、子ども（役）は帽子をとってお辞儀し、「止まってくれてありがとうございます」と礼を述べた。

またドライバー（役）は、「嬉しかった」「急いでいたけど嬉しい」などの思いを述べた。その後、あいさつが当たり前として今も続いている理由（嬉しい、伝統・誇り、見習う等）を考えた。伝統とは引き継がれるにふさわしい価値や行為であるが、それを常々そのように意識させていく継続的な働き掛けこそが伝統や価値の意識化、定着化につながるものであり、教育の要点となるのだと考えた。（4-1-3「当たり前と感じるように続ける」に相当するといえる。）



図2 きっかけとしての場面で起きたこと

中川小の「交通安全ありがとう運動」「あいさつ」が生まれるきっかけとなった状況のイメージ。ここでそれぞれの心が動かされ、また動いたといえる。

これがその時の当事者にとって「当たり前」のことであったということと、その後、このことを、他者が「当たり前」の行為として行うようになっていること＝習慣化とは、根本的に異質である。ただ、このように望ましいことが地域社会に行き渡り、根付くきっかけや教育の内容、そして手掛かりとなる。

### 3-1-3 全校指導における「あいさつ」の価値の理解

「全校話し合い活動」（「かがやきタイム」：平成30年2月14日）

「あいさつをしなかったら」どんな弊害があるかを考えることで、あいさつの大切さに気付かせ、あいさつしようとする態度の育成をねらいとした。5・6年生の運営委員が進行し、縦割りグループや全体で話し合った。あいさつを「学校のよさ（自慢）」にしたいという思いを踏まえて、大切さの確認に留まらず、考察に際して「しなかったら」という逆の視点を与えた。ここでは、「あいさつすること」が当たり前になっており、したがって「しないこと」は当たり前を損ねることが問題（よさや「自慢」にはならない）となった<sup>12)</sup>。

ところで、この場合、よさや「自慢」は、子ども（家庭や地域）や学校における生活習慣や交通安全、道徳教育的意義であり、図2におけるドライバーの立場や心情の問題ではない。したがって、この事実において、ドライバーが停止「しなかったら」という場合は考えられないし、それを前提とすることもできない。しかし、そうしたことは現実にはあり得る（あり得た）のだから、そのような現実の場面で、個々が意識的に働き掛け、心動かすことがなければこの習慣の定着はあり得ないのである。このように考えると、家庭や地域社会、学校は、ドライバーや社会に対して、道徳的心情の起りを期待し、促す働き掛けを行う必要があるし、そうする中で子どもたちの生涯に渡る道徳性の涵養について講じる必要があるのである。

### 3-1-4 感謝としての「あいさつ」とその定着——理由と心を動かし合う働き

中川小の子どもたちにとってあいさつ（通学途上や日常生活で）は「当たり前」であった。その行動（姿）は年長者を見習うことなどによって引き継がれた日常的なものであり、内面的な理由は「感謝——互いに気持ちよい・嬉しい」であった。動作としてのお辞儀は必ずしも感謝によるものではないが、中川小ではその意味によって根付いたのだと考えられる。「3-1-2」の授業者は、子どもたちのあいさつがドライバーを「嬉しくさせた（心を動かした）」と述べているが、そのきっかけは子どもたちがドライバーの行為に親切を感じたことであった。これらのことから、あいさつの指導では、子どもが自身における望ましい気持ちの理由を考えるとともに、相手に対する自身の働き（相手の心を動かす）をも一体的に考えることが必要である。それには子どもの心を動かす存在（に対する認識）が必要であり、取り組みが日常的、自然的である（根付く）ように家庭・地域との連携（協力）を図り、時には互いの気持ちを確認し合う機会を設けることが必要であると考える。中川小に「あいさつ」がよさや誇りとして根付いた契機となったドライバーによる投書は、そうした意味をもっていたといえる<sup>13)</sup>。

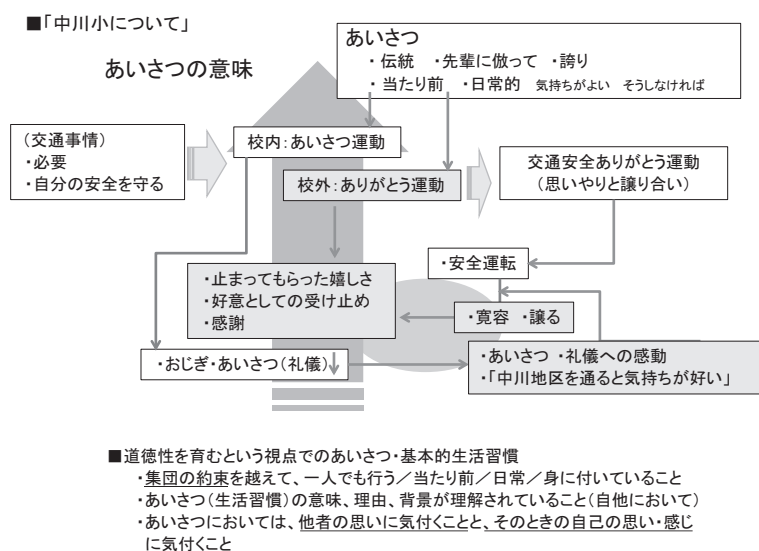


図 3

中川小の「あいさつの意味」を諸要因、諸関係からとらえる。「令和元年度日本道徳教育学会 発表補助資料 p. 27. (「■中川小について」⑤あいさつの意味)」より。

### 3-1-5 考察

中川小におけるあいさつを、特に「交通安全ありがとう運動」の原初に立ち返れば、感謝の気持ちであった。中川小学校では学校の伝統、誇りとするが、引き継がれているもの、引き継ぐ価値のあるものとしての認識がそこにある限り、このような学習活動によっ

て、自身の意識を明らかにし、その由来・背景にある地域としての共通した価値意識を学ぶことができる。そしてそれは、伝統的な価値を基準にして自己（の在り方）を推し量ることができる、日常的な道徳的環境であると考えられる。

ある種の、この地域で大切にされてきたことは、この地域の中で生きていくために大切にすべきことであり、例えば、他者のあいさつに他者の感謝の意を理解し、自身の感謝の意を伝えることは、結局、自身を感謝するものとして認識させることになり、よさを認め合い、よりよく生きることにつながるのである。

### 3-2 基本的な生活習慣についての保護者の意識

生活習慣についての意識調査を、3園（春山幼稚園、愛子幼稚園、名古屋芸術大学附属クリエ幼稚園）の保護者に対して実施した<sup>14</sup>。調べるにあたっては、幼稚園を通してアンケート（記述式）を配布し、回収した。本稿では、特に、意識の傾向や「あいさつ」に関する記述を洗い出し、大切と思う理由や育成するにあたっての意識を検討する手掛かりとした（なお本稿では、具体的な記述を集約するために春山幼稚園の回答のみを用いた）。

以下、三つの視点から検討した内容について示す。

#### 3-2-1 「基本的な生活習慣」のイメージ

##### (1) 質問

「1 『基本的な生活習慣』について、イメージすることを5つお書きください。

言葉でも、場面や説明でもかまいません。（「基本的な生活習慣」ってなんですか？）」

##### (2) 結果（「(3)調査結果一覧」参照）

生命的な行為に関する生活習慣（食事、睡眠、排泄、清潔、着脱衣）は、一通り見られた。ただし、これらには様々な条件や要求などが付帯し、新しい、または条件が輻輳する価値を生み出していることが分かる。したがって、それぞれの項目（生活習慣）が身に付くことで、それ以外の生活習慣がスムーズに行われ、身に付くこともある。例えば、「入浴（清潔）」（入浴の前後には衣服の着脱が伴う）や「排泄」（衣服の着脱や、直す、戻す、整えるなどが必要となる）には、「着脱衣」が関係し、「起床」（「睡眠」）には「食事」（早起きして朝食をとる）が、「起床」でも特に、「早起き」のためには「早寝する」などが関係することである。したがって、保護者にとって何かの項目が気になったり、意識したりしたときに、それを端緒にして、他の生活習慣の指導が関連的に行われる（行われている）ことも考えられる。

だが一方で、本来の指導の意図や目的をはずれ、子どもにとって理解や達成が困難となることも考えられる。例えば「食事」とは、ある保護者にとっては「バランスのとれた食事」であり、また、「いただきますとあいさつをして食べること」や「好き嫌いをしないこと」であるなど、内容や具体的な子どもの姿が異なる。さらにそれらには、時間に関す



る内容（「決まった時間」「三食」「同じ時間」「20分以内」など）や、質や嗜好に関する内容（「バランスよく」「いろんなもの」「好き嫌いなく」「残さず（完食という意味と、作ってくれた方への思いや態度という意味とが見られた）」）、自立や操作の習得に関する内容（「自分で」）などの条件・制限や程度が付加する。そして、それらの様や程度を総括的に表す（子どもの姿に対する要求ともいえる）「きちんと」「ちゃんと」「しっかり」などによって、生活習慣の実践と指導の状況が一層複雑で、困難になると考えられる。

(3) 調査結果一覧

項目	内容：イメージの具体
1 食事	<ul style="list-style-type: none"> <li>・決まった時間に食事する</li> <li>・規則正しい食事</li> <li>・三食、同じ時間に食べる</li> <li>・20分以内に食べる</li> <li>・朝昼夜（三食）ご飯を食べる</li> <li>・朝食をしっかり食べる</li> <li>・バランスのとれた食事</li> <li>・いろんなものをバランスよく食べる</li> <li>・好き嫌いなく食べる</li> <li>・残さず食べる</li> <li>・食事に関するマナー</li> <li>・座って食べる</li> <li>・自分でご飯を食べる</li> <li>・自分のテーブルのイスに座っていただきますと言ってから食べる</li> <li>・おやつ（内容・量）</li> <li>・食事をきちんととる</li> <li>・よく噛む</li> </ul>
2 睡眠	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夜寝る</li> <li>・朝起きる</li> <li>・決まった時間に起きる</li> <li>・夜、同じ時間に寝る</li> <li>・ほぼ同じ時間に寝る（疲れている時は早く寝る）</li> <li>・十分な睡眠</li> <li>・早寝</li> <li>・早起き</li> <li>・早寝早起き（規則正しい生活）</li> <li>・夜更かししない</li> <li>・早寝早起きをし、食事する</li> <li>・早寝早起き朝ごはん</li> <li>・目覚ましなどを用いて自分で起きる</li> <li>・朝起きて、おはようとあいさつをしてトイレに行く</li> <li>・朝起きて顔を洗う</li> </ul>
3 排泄	<ul style="list-style-type: none"> <li>・排泄</li> <li>・トイレ</li> <li>・朝 うんち</li> <li>・トイレのしつけ</li> <li>・1日1回の排便</li> <li>・一人でトイレ</li> <li>・排泄を自分でい、きれいに拭けるようにする</li> <li>・朝起きてトイレに行く</li> <li>・排便をしてから幼稚園</li> <li>・朝起きておはようとあいさつしてトイレに行く</li> <li>・うがい、手洗い、排泄</li> <li>・トイレ、歯磨き、手洗い</li> <li>・トイレ、お風呂</li> </ul>
4 清潔	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体の清潔を保つ</li> <li>・入浴</li> <li>・身の回りを清潔にする</li> <li>・そうじ・そうじ、片付け</li> <li>・食後の歯磨き</li> <li>・歯磨き</li> <li>・朝昼夜歯磨きする</li> <li>・手洗い、うがい、歯磨き</li> <li>・手洗い</li> <li>・手洗い、うがい</li> <li>・帰ってきたら手洗い</li> <li>・うがい</li> <li>・鼻をかむ</li> <li>・髪をとかす</li> </ul>
5 着脱衣	<ul style="list-style-type: none"> <li>・着脱衣</li> <li>・着替え</li> <li>・自分で着替える</li> <li>・洋服の着脱、たたむ</li> <li>・気温によって調整する</li> <li>・身だしなみ</li> <li>・自分で身だしなみを整え、持っていくものを自分で持っていく</li> <li>・自分で靴を履く</li> <li>・靴を脱いだらきれいに整える</li> </ul>
ほか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あいさつ</li> <li>・「ありがとう。ごめんね」が言える（ほかに「あいさつ」）</li> <li>・お礼・謝罪</li> <li>・場面によつてのあいさつ</li> <li>・会話</li> <li>・コミュニケーション</li> <li>・しっかり声を出して話す</li> <li>・言葉・言葉づかい</li> <li>・丁寧な言葉づかい</li> <li>・態度</li> <li>・自分のことは自分です</li> <li>・最低限に為すべきこと</li> <li>・行儀・かかわりの中でルールのあることを覚える</li> <li>・我慢を覚える</li> <li>・時間を意識する</li> <li>・楽しく過ごす</li> <li>・友達と仲よくする</li> <li>・友達関係</li> <li>・親に感謝する</li> <li>・健康でいるために守ること</li> <li>・幼稚園・学校</li> <li>・遊び</li> <li>・運動</li> <li>・学習</li> <li>・労働</li> <li>・活動</li> <li>・動と静のバランス</li> <li>・整理整頓・片付け</li> <li>・手洗い・うがい（※清潔に関するが、独自の項目として書かれた）</li> </ul>

3-2-2 身に付けさせたい「基本的な生活習慣」

(1) 質問

「2 お子さんに身に付けさせたい『基本的な生活習慣』を3つお書きください。（子ど

もにとって大切な「基本的な生活習慣」できれば簡単に理由もお書きください。」

(2) 結果（「(3)調査結果一覧」参照）

保護者が身に付けさせたい生活習慣について、内容と大切と思う理由について、同様、また類似する意味のものを整理した。

着目すべきは、全回答（79件）で、生命的な行為に関する5つの生活習慣よりも、「あいさつ」が多いこと（「食事：42」「睡眠：50」「排泄：4」「清潔：29」「着脱衣：8」「あいさつ：62」）である。

「内容：理由」としては、各項目に共通することだが、子どもの態度やマナー、姿に関するもの（「気持ちよく」「だれにでも」「進んで行く」「はずかしがらず」「相手に聞こえるように」）、そしてそれ以外に、「あいさつ」の必要性や意義・意味に関するもの（「常識」「相手に対する自分の印象」「スムーズな生活を営む」「人として必要なこと」「大人になっても恥ずかしくないように」「社会の一員としての自覚」「一生言い続ける言葉」「周囲の幸せのため」）が見られた。前者は、子どもに対して日々の指導で具体的に指導でき、また、大人がそのような姿を手本として示すことができる。しかし後者は、「あいさつ」の意義や重要性であり、子どもがそれを身に付けていくことと同時に、大人が指導し続けていくことの意義でもある。つまり、あいさつができるような人間であることを大切と考えてあいさつすることと、あいさつするように（心掛けて）子どもを育てることは、大人にとって同義であり、教育的に不可分なのである。

また「理由」から、「あいさつ」は他者への行為であるが、行為自体に留まらず、そうすることの理由や状況判断自体に意義があることが分かる。このことは、あいさつにも先述の困難さや輻輳が存在することを示唆し、それゆえあいさつの意味やそこに起きた理由を明らかにし、指導する必要があるのだと考える。

(3) 調査結果一覧

項目	数	内容：理由
1 食事	42	・生活のリズム ・健康と味覚 ・明るく元気に過ごす ・好き嫌いせず ・バランスよく ・野菜を食べる ・ジャンクではなく自然なもの ・集中して食べる ・よそで食べるときに多く残すのはよくない
2 睡眠	50	・健康 ・身体の成長 ・心身の健康 ・日中の元気な生活 ・自律神経を調える ・免疫力を高める（早寝早起き） ・機嫌よく行動 ・よい朝の目覚め ・情緒の安定 ・機嫌 ・生活のリズム ・夜更かしの癖をつけない ・就寝時間を決めることで、それまでにやることが考えられる ・自分でできること ・小学生になるために ・意欲 ・思考
3 排泄	4	
4 清潔	29	・快適な生活（整理整頓・清潔） ・自分で体調管理する ・風邪・インフルエンザ予防 ・食前の手洗い ・歯みがき（虫歯予防） ・うがい（病気の予防） ・入浴



5	着脱衣	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身の回りの準備が一人でできる</li> <li>・少しずつできることを増やす</li> <li>・自立へのきっかけ</li> <li>・靴を揃える（マナーとして）</li> </ul>
6	あいさつ	62	<ul style="list-style-type: none"> <li>・印象</li> <li>・スムーズな生活</li> <li>・人として必要</li> <li>・気持ちよく</li> <li>・周囲の幸せ</li> <li>・大人になっても恥ずかしくないように</li> <li>・社会の一員としての自覚</li> <li>・常識</li> <li>・一生言い続ける言葉</li> <li>・友達づくり</li> <li>・コミュニケーション</li> <li>・信頼関係</li> <li>・だれにでも</li> <li>・相手への思いやり</li> <li>・相手の気持ちを考え敬う</li> <li>・しっかりできる子になってほしい</li> <li>・進んで行う</li> <li>・はずかしがらず</li> <li>・相手に聞こえるように</li> <li>・「ごめんね」「ありがとう」</li> </ul>
7	ほか	50	<ul style="list-style-type: none"> <li>・片付け</li> <li>・整理整頓</li> <li>・お手伝い</li> <li>・会話、コミュニケーション</li> <li>・はっきり話す</li> <li>・言葉づかい</li> <li>・返事</li> <li>・規則正しい生活</li> <li>・時間を守る</li> <li>・我慢</li> <li>・約束</li> <li>・責任ある行動</li> <li>・迷惑をかけない</li> <li>・マナー、行儀、作法</li> <li>・15分前行動</li> <li>・自立：自分のことは自分で</li> <li>・遊び</li> <li>・仲よく</li> <li>・運動</li> <li>・ストレスを感じないこと</li> <li>・幼稚園</li> <li>・学習、教育</li> <li>・覚える</li> </ul>

### 3-2-3 「基本的な生活習慣」を身に付けさせるために大切なこと

#### (1) 質問

「3 『基本的な生活習慣』を身に付けさせるために大切なことは何だと思えますか。

（これが大切。これが必要など、自由にお書きください）」

#### (2) 結果（「(3)調査結果一覧」参照）

生活習慣は社会生活をおくるための資質であり、それが身に付いてできるようになることは、そのことについての自立を意味する。子どもはそれらを、大人や仲間から学び、繰り返し行い、模倣することで身に付けていく（身に付けるようになる）のだから、生活習慣の育成は、自立を目指し、自立性を育てることといえる。ゆえに、保護者の述べる「当たり前」とは、「そのようにしようとする」との意識と、「そのようにできること」の行為や状況との両面から理解され、前者の意識と後者が達成される過程とが同在する状況を、自立性（が育っている状況）と考えることができる。

身に付けさせるために必要なことは様々（回答）あり、それは、身に付く過程や方法の多様性を意味する。ここで問題なのは、この違いは単なる大人同士の間には存在するものではなく、大人と子どもの間にもあるということだ。指導の過程において、大人が考える（知っている）生活習慣の獲得状況（自立）を、子どもは未だ経験していない（知らない）か、（大人の眼前の状況・姿として）示していない。したがって、「すでに身に付いている。できる」とは認められていないし、自覚してもいない。また、身に付き始めている状況（過程や途上）を、身に付いている段階や状況（姿）とは、必ずしも理解し得ない（ないものは見えにくい）。さらに、多様な大人の考えや願い、社会の要求は、獲得や達成を認める（理解する）ことを困難にしている。結局、生活習慣の育成には、大人の「身に付けさせようとする（ことの）」意識と、子どもの「身に付けようとしている（ことの）」意識との関係性や、「身に付いていること」と「身に付き始めていること」への理解が強く

関与し、つまりは、偶然や曖昧さを避け、「しっかりと」「きちんと」できるまでの反復や継続、自立的に自立したと認められるまでの時間（過程）を要するのである。こうした中で、「認める」「褒める」には、単なる励ましだけではなく、大人の願いが成就した、もしくは成就への過程を確かに見取った喜ばしさがあると考えられる<sup>15)</sup>。

(3) 調査結果一覧

項目	内容
1 親	<ul style="list-style-type: none"> <li>・親とのコミュニケーション ・親子の安定した関係</li> <li>・親と子どもの仲のよい関係 ・余裕をもって接する</li> <li>・一緒に遊ぶ</li> <li>・子どもにとって安心できる存在となる ・親が手本となる</li> <li>・行動で示す ・手本となって一緒に行く</li> <li>・親が手本（かがみ）となる生活スタイルを行う</li> <li>・親も何かに挑戦する姿を見せる ・見本となってあいさつする</li> <li>・何度も話して、見せて、やらせて、覚え、身に付けさせる</li> <li>・普段の生活の中で周りの大人が教えてあげる</li> <li>・親の意見・考えがぶれない</li> <li>・子どもの話や意見をよく聞いて行う</li> <li>・必要に応じた声掛けと促し</li> <li>・行動する前には言わず、できていなかったら言う</li> <li>・親が勝手に決めるのではなく、子どもと話し合って決める</li> <li>・その都度、しつこくならない程度に声を掛ける</li> </ul>
2 継続・繰り返し・リズム	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎日の習慣付け ・自分で進んで取り組むリズムを付ける</li> <li>・繰り返す ・何度も繰り返し伝える ・家で毎回やらせる</li> <li>・毎日のコツコツした積み重ね ・時間を決めて行動する</li> <li>・本人に繰り返し積極的にやらせる</li> <li>・根気強く教える ・何度も口にして覚えてもらう</li> <li>・一貫して繰り返し、同じことを行う</li> </ul>
3 褒める	<ul style="list-style-type: none"> <li>・褒める ・褒めておだてる ・褒めてやる気を出させる</li> <li>・（「すごい、自分で言えたね」「できたね」と認めて褒めてあげると自分でできるようになった）</li> <li>・自分でするのを見守り、認めてあげる</li> <li>・興味ややる気をもたせる ・やる気を支えて、背中を押す</li> <li>・優しく援助する ・楽しい感じで行う</li> <li>・甘えを多くせず決めたことはしっかり守って継続させること</li> <li>・あまり怒らない</li> </ul>
4 普通・日常・当たり前	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活の中で普通に作る ・毎日、それが当たり前と感じるように続ける</li> <li>・「当たり前」</li> </ul>
5 説明・理由・声掛け	<ul style="list-style-type: none"> <li>・しないと気持ちが悪いことや大切な理由を知らせる</li> <li>・日々の生活の中で必要に応じて分かりやすく説明する</li> <li>・都度、声掛けする ・適度な声掛け</li> </ul>
6 ほか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・規則正しい生活を心掛けさせる</li> <li>・早寝早起き ・適度な運動。</li> </ul>

3-3 倉橋惣三における「感受」

倉橋は、子どもの内側で徳性が培われていくことと、徳や価値を言葉によって学ぶことを同じとは考えない。特に、学齢前の子どもには、「出来るだけその徳生活を意識の上にはほせないようにしたい」し、観念的ではなく体験的が望ましいとするが、「体験」的であることは難しいとする<sup>16)</sup>。彼は、人間が「純粹に徳のために徳を実行し得るものか」と疑問を呈し、「人間のなし得ること、またなさねばならぬと教えられること」<sup>17)</sup>

は、根源的には他人の好意の感受（「好意を受け取り得るに始まる」もの）であるとする<sup>18)</sup>。その好意とは「結果」ではなく、「好意そのもの」を指す<sup>19)</sup>。とはいえ、私たちは通常、結果を通して「好意そのもの」を感じ取ったり、考えたりするし、とはいえ、必ずしも結果（事象）を好意として受け止めるとも限らない。それでも各人によって異なる受け止め方や感受性が道徳性の根本であり、育てられるものであるならば、「受け止め」「感受する」ことやその機会の意味を教育的に問う必要があるだろう。

この視点は、教育に、人間の好意に対する感受能力を育てる機能と可能性を認め、同時に、人間の感受的資質の変容を道徳的成長と位置付けるものである。変容といえども基本的に存在自体が変わるわけではなく、倉橋はそのような人間の内的生活の変化を、「好意の不良導体から良導体にかわった時」と述べる<sup>20)</sup>。ただ、倉橋は良導体が感受する好意も意識させることなく、有り難いという感謝も「無意識」の中に持たせたいとする<sup>21)</sup>。そしてそのためには、まず子どもの好意を敏感に「一つ残らず受取ってやりたい」と述べる<sup>22)</sup>。

だが、幼い子どもの好意が行為として発露する時には不適切な場合があることが予想される。そこで、彼はそこに「容赦」することの必要性を説く<sup>23)</sup>。好意と感受は大人と子ども双方が抱くものだが、子どものそれが未熟である場合、子どもは大人の「容赦」を、最も好ましい好意として感受するに違いない。これは、未経験で困難な現実生活の中で好意を感受することによって幸せを感じ、それによって実際によりよい生き方（生活）ができる（それを好み・望み選択する）ということにつながると考える。これらのことから、子どもの「無意識」な有り難さの感受による感謝のあいさつは、ふと行われるものだと考えられ、それを目の当たりにすることで、大人は子どもの感受の対象としての自身の好意を知ることができるのである。

#### 4 さいごに——考察

中川小の実践では、地域の交通事情をきっかけとした子どもとドライバーの遭遇と、そこでの「ありがとう」というあいさつが大きな意味をもつが、そうしたことは当時の地域における唯一の、特別な出来事であったわけではなかつただろう。当事者たち同様の経験は、他にもあったと考えるのが自然である。だが、その当事者双方は、「親切」や「感謝」、「よかれ」という心情や価値をふと感じ、相手の行為に好意を感受した<sup>24)</sup>。この同時的な好意の感受という内面性こそが、自然な道徳性の発露、そして行為の源であったのだと考えられる。ただし、相互に好意を認め合ったのか、それとも他に共に認め得る共通した好意や価値が存在したのかは分からない。

では、どのように子どもの感受性は養われ、大人は、自然になされた子どものお辞儀（あいさつ）に「好意そのもの」（や価値）を感受したのだろうか。およそそれは、例えば「あっ、そうだそうだ」というような感受の同時的、同質的な発生であり、ある好意や価

値に対する感受の共鳴・共振のように考えることができる。そしてこの場合、子どもと大人の好意や価値の感受自体に違いはなく（同等）、「結果」だけが違うことになるのだろう<sup>25)</sup>。

考察を進める中で、中川小のある地域で用いられる、感謝を意味する「おしょうしな」という方言を思い出した。「おしょうしな」は、ある説によれば、「しょうし=笑止」に由来し、「手厚いもてなしを受けて少し気恥ずかしく、恐縮した」という意味であり<sup>26)</sup>、親しい間柄では「おしょうし、おしょうし」と気軽に用いられもする。感謝の感じ方や表現は様々だが、感謝としてのあいさつを「おしょうしな」から考えると、小学生は、ドライバーが先を急ぐにもかかわらず道を譲ってくれた厚い好意に恐縮し、ドライバーもまた、小学生の思わぬ丁寧なあいさつに恐縮したのだといえる。恐縮は相手の厚意を勿体なく、申し訳なく思うことであり、相手への敬意と謙譲の意でもある<sup>27)</sup>。つまり、互いの好意の感受は、感謝に内在する（家庭や地域社会で繰り返し身に付けてきた当たり前の生活習慣であり、無意識である）「おしょうしな」（の心）を揺さぶり、それぞれの行為（小学生のあいさつ。倉橋における「結果」）を発露させたのだと考えられる。（了）

#### 謝辞

「交通安全ありがとう運動」をはじめ、「あいさつ」の実践研究について、種々のご協力、ご助言を賜りました、山口芳弘校長先生（平成30年度：南陽市立中川小学校、令和元年度：同漆山小学校、令和2年度：同沖郷小学校）、教職員の方々、児童の皆様に感謝申し上げます。

また、「基本的な生活習慣」に対する意識調査にご協力くださった、春山幼稚園（春山昭子 園長先生）、愛子幼稚園（庄子むつ子 園長先生）、名古屋芸術大学附属クリエ幼稚園（鎌倉博 前園長先生）の教職員の方々、園児、保護者の皆様に感謝申し上げます。

本研究は、令和元年度「名古屋芸術大学特別研究費」の助成を受けて取り組んだ「道徳性の育成における基本的な生活習慣の意味の考察—あいさつ—」の内容の一部に、新たな考察を加えたものである。研究費助成を賜りました名古屋芸術大学に、心から感謝を申し上げます。

#### 註

- 1) 文部科学省「幼稚園教育要領解説」平成29年、p. 210。
- 2) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」平成29年、p. 26。
- 3) 仙台市立上杉山通小学校「平成30年度重点事項(2) 保護者や地域と連携し、場に応じたあいさつの推進を図る」「協働型学校評価 取組2 自分から進んで、場に応じたあいさつができる児童の育成」、『平成30年度学校要覧』<http://www.sendai-c.ed.jp/~kami-sho/2019/0628>参照。
- 4) 気持ちは心持ちや気分でもある。自他の気分を損ねないことは関わりを築く要素と考えられる。
- 5) それゆえ、「当たり前」という認識が生まれることもあるのだと考えられる。
- 6) 常識や自明として、違和感無く理解され、実践（身に付く）される理由を検討する。
- 7) 調査、参観した平成29、30年度の実践や教育計画（『学校経営概要』等）を参考とする。
- 8) 口頭発表、令和元年11月10日、広島大学。

- 9) 同小学校区にある児童館と連携した一貫教育における位置付けとなっている。
- 10) 「PTA 活動」に「交通安全ありがとう運動の意識の継承」、「あいさつ運動」（運営委員）や「生活リズム、あいさつ運動への取り組み」（実行委員会）が取り上げられている。
- 11) 昭和62年、「交通安全ありがとう運動」の実態をNHK教育テレビが全国に放映。昭和63年、学校安全功労団体として「文部大臣表彰」受賞。平成元年、安全功労者（学校安全功労団体）として「内閣総理大臣表彰」受賞。
- 12) あいさつがあったこと＝よいことは、「交通安全」の成果と関連付けて考えられている。
- 13) なにかよいことを感じ、それを伝えるなど表出・表現する。それは時に相手に伝わり、そうした状況が他者に伝わる。道徳科で目指す、対話的な学習にはこうした機会が十分に含まれていると考える。
- 14) 春山幼稚園（学校法人春山学園：羽生市）、愛子幼稚園（学校法人青空学園：仙台市）、名古屋芸術大学附属クリエ幼稚園（学校法人名古屋自由学院：北名古屋市）。令和元年度に実施。書式項目等は省略。実施期に新型コロナウイルス感染により教育及び社会における諸活動が自粛される状況となり、各園とも予定より回収期間がずれたり、数が下回ったりした。本稿で扱う、春山幼稚園の回収率は全体で約70%であり、本研究が目的とする意識の傾向を探り、考察の手掛かりとするにあたって、貴重な素材となった。
- 15) 生活習慣の獲得が、子どもが生きていくために必要なことと考えれば、大人は安心するだろうし、様々な困難を乗り越える力の獲得として、安全であることへの安堵（そうだと安心する）を抱くと考えられる。
- 16) 倉橋惣三「かく育てたしと思うこと」『幼稚園雑草（上）』フレーベル館、2008年、p. 247。
- 17) 人間のなせることや、義務、徳の教育など哲学的な課題に対する疑問と言える。
- 18) 倉橋、同上、p. 249。
- 19) 倉橋、同上、p. 251。
- 20) 倉橋、同上、p. 252。  
 倉橋はこの問題を、親鸞の行や徳を離れた純他力による信仰往生の思想の中にとらえ、本当の感受とは、人間が信仰において他力や仏の慈悲に感受を抱くこと、つまりそれらに対する良導体たることと述べている。つまり、中川小の子どもは、ふと感謝の気持ちを抱いた瞬間、ドライバーに親切心があったかどうかを理解していないし、それを意識したお礼として、形式を踏まえたお辞儀をしたのでもない。まさに、そのときその場にいた自分が、自分に起きたよさを、おかげとして受け止めたことこそが事実であり、ドライバーの親切心の存在は、子どもがそう信じたことの内側に存在するのだと考えられる。ドライバーの子どもに対する意識についてもこれと同様である。
- 21) 倉橋、同上、p. 255。
- 22) 倉橋、同上、p. 256。
- 23) 倉橋、同上、p. 258。
- 24) 「止まってくれた」「自分たちのために」「ここは、急いでいるであろうに」そうした思いが重なったと考えられる。いわゆる好意としての受け止めである。この好意の受け止めが感応である。
- 25) これまでの考察から、自然にあいさつができるという資質は、家族（大人）らと繰り返される日常のやり取りや指導における好意の受容と容赦、また、中川小のような共有される価値の学習によって培われると考えられる。子どもと大人では感謝の表し方やその行為は異なるが、ありがたい、申し訳ない、勿体ないと感じること自体に変わりはない。
- 26) 『『おしょうしな』とは？ 山形の方言の意味や使い方を知ろう』<https://celestia358.luxe/2020/1102>。ほか、参照。

- 27) 相手の意思に関わらず好意を感受することは、倉橋のいう純他力や「往生信仰」に通じるのではないだろうか。